

ドストエフスキーを読む会 報告 『白痴』

報告者 田尻道宏さん

今回は参加者が少人数であり、気兼ねなく発言できたことから議論が盛り上がった。作者の創作意図として知られる「美しい人間」、レーベジェフが論じる黙示録の話なども話題になったが、ここは報告者が提起した問題を中心に振り返ることにする。まずはその問題提起について資料から直接引用する。「『白痴』の中で、ムイシュキン公爵は、ナスターシャを救いたいと考えて行動していました。何がうまくいかず悲劇になってしまったのか？」

「何がうまくいかず・・・」の問いかけに関連させてムイシュキン公爵の性格的、身体的欠陥を指摘することはたやすいが、それはあまり意味のある議論とは思えない。たとえムイシュキンではなく別の通常の人物であったとしてもあの状況でナスターシャ・フィリッポヴナを救うことは無理に違いないからだ。それでも報告者の指摘だけを取り上げると、ムイシュキン公爵は彼自身の罪深さ(罪とは欲望のことだという)に関する自覚がないとのことである。果たしてムイシュキン公爵に人並みの欲望があったのかという疑問もあるが、どちらにせよそのことがナスターシャ・フィリッポヴナにどう影響したかは想像できる。「かわいそうだから愛します」発言ほどではないにしろ彼女の誇りを傷つけ、彼女がムイシュキンを拒絶してしまう結果となったという意味ではうまくいかなかった原因の一つと考えられるだろう。

私は報告者の問いかけにある「ムイシュキン公爵は、ナスターシャを救いたいと考えて行動していました。」に対して敢えて「ムイシュキンは本当にナスターシャ・フィリッポヴナを救う気があったのか？」という逆質問を試みた。当然、それに対しての参加者の意見は「彼には救おうという意思があった」が大勢であった。ではその根拠は？当日の議論を振り返ってみて最も有力と思えるのはムイシュキン公爵がエパンチン家の三姉妹に語った、スイスのマリイに関するエピソードだ。マリイはある男性に誘惑されて村を離れたが後に捨てられて帰ってくる。村人たちは彼女に対して厳しく当たるようになり、村の教師までもがマリイを誹謗・中傷する。ムイシュキン公爵はマリイを庇い、人々を説得してマリイへの誹謗・中傷をやめさせる。これはマリイをナスターシャ・フィリッポヴナに置き換えれば『白痴』全体の縮図ともいえるエピソードだ。ムイシュキン公爵はこの時と同じようにやればナスターシャ・フィリッポヴナを救えるだろうと考えたのだろう。成功体験の自己模倣は失敗するが、ムイシュキン公爵には結果はともかく救おうという意思はあったということだ。なお、このエピソード中でもムイシュキン公爵は「かわいそうに思うから(マリイに)接吻するのだ」と当の本人に打ち明けている。

ムイシュキン公爵はナスターシャ・フィリッポヴナの異常さを認めていた。そしてロゴージンが彼女を殺めてしまうことも予見していた。起きるべくして悲劇は起きた。現場を目撃したムイシュキン公爵は一見冷静そうに見える。しかしその後発狂した。彼はどんな気持ちで結末を迎えたのだろう。「自分はやれるだけのことはやった」という達成感(不適切な表現かもしれないが)なのだろうか？そもそもムイシュキン公爵が置かれた状況は私の言葉では「無理ゲーにも程がある」ものだ。彼には心から「ご苦労さまでした」と伝えたい。